駆け足
――ジャック・デリダにおける脱構築と政治の速度

ジェローム・レーブル

政治は速く進み、はてしなく加速している。研究教育の改革、精神医療施設への収容規定の改革、未成年者の処罰の改革はほとんどついて行けないほどであり、この無理矢理なテンポには労働組合も経営管理の専門家も驚くばかりである。こうした事態について、つまりこの政治の速度について考えることはできるだろうか。政治はあまりに速く進展しすぎるとひとりでに脱構築されるのだと我々は真っ先に考えてしまうかもしれない。しかし、こうしたことは実証されず、恐ろしいほどの一貫性で万事が同じ方向へと進んでいる。それでは、政治が速度を落とすように抵抗しなければならないのだろうか。あるいは反対に、我々は政治と同じ速度で進まなければならないのだろうか。Pas de course〔駆け足＝走るな〕[1]と脱構築は我々に言っているように思われる。Pas de course〔駆け足＝走るな〕とはいったい何を意味するのだろうか。急いではならない、速度を落とし、足並みをそろえたまま進まなければならない、ということだろうか。しかし同時に、この同じ命令(Pas de course!)は、リトレ辞典が記すように「本当に走るのではなく」、可能なかぎり速く歩き、走行すれすれまで歩調を速めなければならないということをも意味する。こうした未決定な場で前進するためには、脱構築と政治の速度とを関連づけねばならないとともに、政治の脱構築にある種の速度を認めようとしなければならない。だが、速度〔＝速さ〕〔vitesse〕という表現そのものが、速さの度合いと高速とを同時に示す以上、それはどのような速度なのだろうか。

---

[1]〔訳註〕名詞 course は「走ること」を意味し、名詞 pas「歩み」を付加して pas de course「駆け足」という表現となる。この同じ言い回しで pas de を否定表現ととらえるなら、「走るな」とも読み取れる。

A. 政治における速度に抗して

「最も強い者の理屈はいつも最良のものである」[2]という事態が何度も同じ仕方でくり返えされているように思われる。デリダのセミナー『獣と主権者』の冒頭でも、「最も強い者の理屈はいつも最良のものである。それはじきに明らかになるだろう」と同じことが述べられている。しかし同時に、それはもう少ししなければ始まらない。つまり、脱構築の最初の効果は、最も強い者の理屈を証明したり示したりすることを遅延させることである。遅延させるといっても、もちろんそうした証明を開始した上での話である。脱構築は「足音を忍ばせて＝狼の足取りで〔à pas de loup〕」、すなわち「一歩一歩慎重に〔pas à pas〕」[3]、進展していない様子、何ごとも生じていない様子で進んでいくのである。

かくして、意表をつくようなものが行動し、作用しているように思われるだろう。たとえば、ラ・フォンテーヌの狼が小川の上流に、あらゆる国家の主権者が政治の源流に突然現れる。とはいえ、小羊を驚かせることと、小羊を驚かせる狼の意表をつくことは違う。デリダの思考は、したがって、狼のリズムに従うことではないようだ。狼は獲物を驚かせ、不意打ち〔surprise〕と捕獲〔prise〕とのあいだで、無益なことに、獲物が自分の余命について考える時間を与える。反対に、脱構築的思考は捕獲の瞬間を無際限に遅延させることで狼を驚かせるのである。この思考の歩みは、ブランショの小説に宿る遠ざかりの歩みのように、近づくと同時に遠ざかり、移動の時間をずらすのだ[4]。そのようにして脱構築は、最も強い者の権利がもはや行使されえない時間のうちに配され、前もって小羊のように振る舞うのである。

そのため、「じきに」という語は思考が力に強いる差延のしるしであり、そのとき、思考が力よりも強いことが示される。「私は、最も強い者の理屈がいつも最良のもの

---

[2] Jean de La Fontaine, « Le loup et l'agneau » *Fables*, I, x, cité par Jacques Derrida *in La Bête et le Souverain*, Galilée, Paris, 2008, p. 26〔ラ・フォンテーヌ『寓話』今野一雄訳、上巻、岩波文庫、1972 年、86 頁〕. この寓話は以前『ならず者たち』(*Voyous*, Galilée, Paris, 2003)の冒頭でも取り上げられている〔ジャック・デリダ『ならず者たち』鵜飼哲・高橋哲哉訳、みすず書房、2009 年、5 頁〕。

[3] Jacques Derrida, *La Bête et le Souverain*, p. 19.

[4] *Id.*, *Parages*, p. 30〔ジャック・デリダ『境域』若森栄樹訳、書肆心水、2010 年、47-48 頁〕.

であるということを示したり、証明したりする瞬間を遅らせるためにその強者の理屈を盾に取る」[5]。このような現在の放棄、こうした「時間を問いに付すこと」[6]こそが、国家に対立する思考の制度的な唯一の力なのである。もうひとつの差延のしるしは 250 頁後に見いだされるが、それはルイ 14 世が象の解剖に立ち会うという奇妙な場面である。この主権者は学び取るはずだが、そこでもまた同じことがくり返される。最も強い者の権利が権利であるためにはひたすら力に依拠するしかない。〔力と権利の〕相違が、権利であろうとする力に影響を及ぼす。したがって、ここでは象を犠牲にして、権力は知と密接に結びついている。それゆえ、こうした実験証明が遅延させているのはこの権力の知だ。何しろ、主権者という保証が一度も確立しておらず、力が不正にも力についての思考に常に先行することが示されるのだから。「知を備えているひとや確実な知の多くの秩序や権威を宙づりにするのは、まさにその歩み、一歩の運動なのである」[7]。そのことを小羊はあまりに知りすぎているのだが、脱構築は前もって力関係を逆転させ、狼を小羊の獲物にする。権力が行使されようとする瞬間に、当の権力と比べて、脱構築はそのことにさほど関知しない知であることがたんに示されるのだ。シモニデス〔古代ギリシアの詩人〕は、神とは何かと尋ねる僭主ヒエロンに対して同じように振る舞う。シモニデスは一日で答える約束をするのだが、二日、四日、さらには数えきれないほどの時間がかかったので、「このことについて深く考えれば考えるほど、より難解なことに思われます」[8]と正当化する。そのようにして、君主の上方に何らかの神を配置することを避けて、この賢者は冷静に下方にいつづけるのである。

こうした立場の重大な裏側を期待してしまう。あまりにも速く作用する力はたとえ勝利するとしてもおのれの権利を失い、その一方で、権利に時間を与え、時間に権利を与えねばならない。「最も生き生きとした者の理屈がいつも最良のものである。それはじきに明らかになるだろう」。

---

[5] *Id.*, *La Bête et le Souverain*, p. 117.
[6] *Id.*, *L'Université sans condition*, Galilée, Paris, 2001, p. 62〔ジャック・デリダ『条件なき大学』西山雄二訳、月曜社、2008 年、58 頁〕.
[7] *Id.*, *La Bête et le Souverain*, p. 375.
[8] Cicéron, *De la Nature des dieux*, I, XXII〔『キケロー選集　11 巻』山下太郎・五之治昌比呂訳、岩波書店、2000 年、44 頁〕.

このように寓話を変更する権利を我々はもっているのだろうか。そう、主権の譲渡によって修正は可能である。この寓話は時の流れとともに著しく変更されてしまったので、我々は何かを付加しても差し支えはない。そうした付加はパスカルのある考えに対してもなされる――「正しいものに従うことは正しく、最も速いものに従うことは必然である（…）ひとは正しいものを速く到来させることができなかったので、速いものを正しいとしたのである」[9]、と。そして、速度に対するこれと同じような批判は、ポール・ヴィリリオの考えのうちにそのまま見いだされる。彼にとって、情報や輸送の速度によって規定される速度術（ドロモロジー）的社会は、いたるところで起こる事故の危険に対する空間的な目印を見失っているのである。我々はこうした速度で道すがらデリダに遭遇するのだろうか。速度に対する批判としての脱構築に出会うのだろうか。そのような出会いは一目瞭然ではなく、むしろ不意に訪れる。たとえば、狼たち自身にとって狼であるような狼、すなわち、いくつかの国家が自らの消滅という危険を冒して配備している核戦力の問題をとり上げよう。「はじめに、どうやら速度があった、常にすでにスピードを上げ、相手を追い抜くような速度が」[10]。実際、軍備拡張競争とはよりいっそう速い競争、つまり、攻撃と反撃の時間差の短縮への準備にすぎない。その時間差が短くなればなるほど、強国間の力関係は相互破壊という点でより均等化し、それこそが〔人類の〕平和と存続の唯一のチャンスとなる。そこでデリダは「今日、我々は、速度の別の経験をしているのだろうか」[11]と自問する。実際は核に関する決定が様々な知（科学、軍事、外交）のつながりを含んでいるので、自明に思われているもの、すなわち知と権力の不可分性、さらには力と勝利の不可分性を問う可能性が開かれる。核に対するこうした未決定だけが核抑止を支えており、つまり、核が破壊をもたらしかねない局面における差延となっている。「おそらくあなたたちは、核の状況を何らかの寓話に還元することをとんでもないことのように考えるだろう」[12]とデリダは譲歩するが、〔核による世

---

[9] パスカルのパンセ（B 298）の原文〔「正しいものに従うことは正しく、最も強いものに従うことは必然である。〔…〕ひとは正しいものを強くできなかったので、強いものを正しいとした」〕を変更したもの〔『パスカル著作集 IV』田辺保訳、教文館、1981 年、151-152 頁〕。

[10] *In* Jacques Derrida, *Psyché, Inventions de l'autre*, Galilée, Paris, 1987-1998, p. 495-418 ; première citation p. 395.

[11] *Ibid.*, p. 396.

[12] *Ibid.*, p. 402.

界の〕全滅は現実になりうるひとつの寓話である。自分たちの防御システムに躍起になっている強国の自己免疫がこの寓話の唯一の真実なのである。

こうしたことは、デリダが取り組んだあらゆるテキストが時間かせぎのテキストであるということを意味するのだろうか。急ぎ足で一般化してはならないが、デリダがこのような分野において、知を欠いたまま力を利用するあらゆる性急さを警戒していることは確かである。「アンガジュマン〔社会参加〕は依然として非常に美しい言葉です」[13]とサルトルについて語る彼は、遅れてきてそのように述べている。「期日が迫っているというのに、私はまだ準備ができていないのです」[14]。そしてデリダは、両大戦後の復興期の最中に書かれたサルトルの有名な論文（「自らの時代のために書く」、1948 年）を註釈しながら、サルトルは自分が救おうとするもの（歴史、真理、絶対者、ついには一匹の動物さえ救わない全体的人間）をことごとく奪い去ってしまうと指摘する。よく知られているように、サルトルにとって、作家のアンガジュマンはおのれの生を永遠にではなく、限られた有限な未来において正当化する。ところが、こうした未来をつかみとる行為はまさに作家を走らせ、さらには死に至らしめる。「マラトンの伝令者はアテネにたどりつく一時間前に死んでいたという話だった。だが彼は死んでいたのに、なおも走りつづけたのだ（…）それは美しい神話で、死者がまだ死後わずかな時間は生きているかのように振る舞うことを示してくれる」[15]。デリダは、あらゆるアンガジュマンに穴を穿ち、その速度を落とす未来の決定不可能な局面を問わないという点でサルトルを非難し、責任、さらには緊急性を強調しながら、サルトルを自分の前方に走らせておくのである。

このことから、サルトルは愚かであると言うまでの間には、たった一歩しかないが、デリダはその一歩を踏み出さない。たとえば、『マルクスの亡霊たち』など「リュブリヤナ行きのフライトの途中で」[16]あまりにも速く読めると考え、マルクスについて論じるのが遅いという理由でデリダを必死になって非難する幾人かのマルクス主義者たちについても、彼は愚かだとは言わない。デリダは次のように指摘する

---

[13] *Id.*, *Papier Machine,* Galilée, Paris, 2001, p. 178 〔ジャック・デリダ『パピエ・マシン』中山元訳、下巻、ちくま学芸文庫、2005 年、29 頁〕.
[14] *Ibid.*, p. 167〔前掲書、10 頁〕.
[15] *Ibid.*, p. 182〔前掲書、36 頁〕.
[16] Cité par Derrida, *Marx and Sons*, PUF/ Galilée, Paris, 2002, p. 34〔ジャック・デリダ『マルクスと息子たち』國分功一郎訳、岩波書店、2004 年、41 頁〕.

だけだ。「我々は何も同じ速度でなすということができない。そして、これは真面目に言っているのだが、それこそがあらゆる誤解の主な原因である」[17]。したがって、デカルト的な意味で、性急さが明らかに愚かさのひとつの特徴となるには、おそらく、『獣と主権者』を待たねばならない[18]。アンガジュマンに対するデリダの関係は、彼の愚かさに対する関係に非常に近いように思われる。つまり、彼はアンガジュマンを避けるのではなく、それを不可避だと考えるのだが、あくまでもアンガジュマンにブレーキをかけ、これを問いただす時間を欲しているだけである。

ここまでの段階で、我々は、時間かせぎをするデリダというイメージを示してきた。ハンニバル率いる軍隊（と軍用象）に抵抗する際、正面衝突を日に日に延期しつつ沿岸部から攻撃を試みた古代ローマの独裁官〔クィントゥス・ファビウス・マクシムス〕に、通常「クンクタートル〔cunctator〕」〔ラテン語で「愚図」「のろま」の意味〕という形容詞が付けられるが、これにならえば、愚図なデリダというイメージである。しかし、もし脱構築が力に対しても愚かさに対しても差延を強いるとすれば、速度に対するあらゆる批判にはひとつの盲点がある。それはまさに、批判が時間通りにやってくることはないということである。レヴィナスが言うように、遅れて到着することは倫理的義務の緊急性を強く感じさせる。戦略上、時間かせぎは敵の力を削ぐことができる――「愚図の」ファビウスは小羊（ovicula）というあだ名をも引き受けねばならなかった。だが、政治において、あらゆる遅延から考えられるのはあくまでも政治の失敗そのものである。はじめにどうやら敗北があった、というわけである。デリダ自身、結論を急ぎながら、知の無条件性を守る責任を負う大学人たちに対して、「時間をかけてください、しかし、急いでそうしてください。何があなた方を待ち受けているのか、あなた方は知らないのですから」[19]と述べている。また、彼は核の危険性についても同じことをくり返している。「決定的かつ抑止力となる減速は危険な加速と同様に危ういものであるだろう」[20]。それゆえ、速度に対する脱構築の別の関係だけが脱構築を批判以上のものにし、真に政治的なも

---

[17] *Ibid.*, p.34, note 22〔前掲書、129 頁〕.
[18] *Id.*, *La Bête et le Souverain*, p. 104.
[19] *Id.*, *L'Université sans condition*, p. 79〔『条件なき大学』、73 頁〕.
[20] *Id.*, *La Bête et le Souverain*, p. 397.

のにしうるのである。

B. 脱構築がたどる様々な道

まるで不可能な寓話に直面しているようだ――政治というウサギは時間通りに出発し、思考というカメは追い抜かれるのだが、にもかかわらずカメはウサギに再び追いつかねばならない。こうしたジレンマを解消するために、カメはただ有利な結果につながる道を模索するほかない。

1）歴史的な道

最初の道は歴史的かつ哲学的な方法論の便宜を図って、寓話や動物たちを無視する道である。そのとき我々は、政治の速度がうわべだけの皮相なものでしかないということを主張し、思考が別のリズムに従っていることを正当化することができる。「私が探し求めているものは、脱‐政治化ではなく別の政治化に至るような、国民国家的主権の支配的で伝統的な概念の（…）緩慢で差異化された脱構築なのでしょう」[21]。このようにゆっくりとした再政治化は様々な実際の出来事のリズムに、つまり「諸々の危機や戦争、虐殺を通して（…）世界に到来するもののリズム」[22]に従おうとする。この引用部分では歴史家ピエール・ノラの声が聞こえてくるようだが、ノラにとって、歴史が人間の移り変わりという時間的振幅を拡張することであるのに対して、直接的な現在性〔actualité〕は解釈を欠いた一連の出来事をもたらす。ただし、歴史家は、自分の仕事が左右させる事実の構築という避けられない部分を強調しながら慎重にリズムに変化を与える。これに対して、デリダはある種の危険を冒して、脱構築のリズムが「世界に到来するもののリズム」であり、「諸々の危機や戦争、虐殺を通して」把握されると述べる。同じセミナーのなかで、デリダは「～を通して〔à travers〕」という表現の使い方のことでラカンを非難しており、「～を通して」は「あらゆる種類の無意識的な論理や修辞を危険にさらす」[23]と述べている。

---

[21] *Ibid.*, p. 113.
[22] *Ibid.*, p. 114.
[23] *Ibid.,* p. 154.

この主張は、速度や横断〔traversée〕が直接問われている本稿によく当てはまる事例だ。実際、より本質的でより緩慢な出来事に達するためには、どのような速度で政治的な現在性を通過しなけなければならないのだろうか。この問いに対する可能な答えはない。言い換えれば、歴史を現在性から、あるいは歴史を寓話から本質的に区別する術などないのである。したがってこの道を断念し、我らの羊の群れへと戻ろう。あるいはむしろ、小羊の前にいつも不意に現れる狼へと立ち戻ろう。

２）麻痺の道

第二の道は麻痺の道である。というのも、政治があまりに速く進展してしまうと、思考はおそらく、その差異化や分析の働きそのものによって、政治を動けなくさせる力を発揮するからである。かくしてプラトンは『ソピステス』において狼を狩り立てた。これは、狩猟動物を獲物として捕らえるという奇妙な狩りがおそらく最初に起こった場面である。そのとき、思考の足取りは非常に遅いようにみえるが、それは足取りが一連の差異化全体を経ているからだ。だが同時に、狩猟タイプの分析はこの捕食者が動けなくなるまで追い詰め、生き物の諸ジャンルについての分析は捕食者を罠のなかで麻痺させる。要するに、差異化による分析はそれ自身一種の狩りに、獲物を包囲する狩りに相当するのである。したがって、哲学者はソフィストを、犬は狼を捕らえる。なぜなら、ソフィストの哲学者に対する関係は狼の犬に対する関係と同じだからである[24]。私はここで、『ソピステス』と『政治学』との関係を強調することも、主権者の側に犬（ミッテランのニューファンドランド犬、シラクやプーチン、タイ王国の君主の犬、選挙での勝利を受けてオバマに贈られた低アレルギー誘発性の犬）をつないでおく鎖をたどることもできない。私には、デリダがドゥルーズとの論争においてさえも、なぜいつも家畜と野生動物（そして彼が好んだ動物である狼と猫）とを関連づけようとしないのか、と問う余裕はない。ここで最も重要なのは、彼にとって哲学者は犬ではなく、狼だということである。そして、それは脱構築がプラトン的な差異化からかけ離れたものであるという事実と関係がないわけではない。麻痺〔paralyse〕のごとき分析〔analyse〕は罠にはまった単純な生き物を捕らえようとする。だが、分析はひとりでにおのれを脱構築してしま

[24] Platon, *Le Sophiste*, 234a-b, 231a〔『プラトン全集 3 巻』藤沢令夫・水野有庸訳、岩波書店、1976 年、56-57 頁、46 頁〕.

う。というのも、その分析が獲物を縛りつけようとするのは、まさに縛りを解くことによってであるからだ。換言すれば、分析は「一歩踏み出すには、絆と結び目が必要である」[25]という単純さで立ち止まり、おのれ自身を麻痺させてしまうのである。

３）不意の到来の道

したがって、足音を忍ばせながら＝狼の足取りで、新たな道で再び始めよう、ほかならぬ不意の到来という道で。そもそも、我々は狼がどのくらいの速度で足並みをそろえて進むのかを本当に知っているのだろうか。それは不確かなままである。狼の足取りはまさに歩行と駆け足のあいだで決定されえない。狼の一歩一歩はその両脚がほとんど地面についていないようなものでもなければ、歩くときのようにいつも地面におろされているのでもなく、走るときのように一時的に足が持ち上げられるわけでもない。狼の足取りと動物との関係は、駆け足と人間との関係に等しい。ところで、まさにその未決定によって、狼の足取りは最も速く走るときよりも速くなり、狼とその到来を感じ取れないようにする。それゆえ狼は麻痺させられることがなく、彼の到来は避けられない。このことを不意の到来と呼ばなければならない。すなわち、「スペクタクルを欠いた、一種の侵入、それも人目を忍んだ介入であり、表面化することのない不法侵入」[26]である。それはつまり、出発なき到来であり、光の速度を超える絶対的な速度なのである。

今や、政治と同じ速度で進むことで、脱構築はそれが速度や主権に対するたんなる批判にとどまらないことを示している。脱構築は政治についての真なる思考であり、今、つまり英語で言えば、presently〔まもなく＝現在〕[27]、政治を捉えるのに適した思考なのである。というのも、presently としての今は「じきに〔tout à l'heure〕」、あるいは「ただちに〔tout de suite〕」――「じきに」は「ただちに」をも含意する――を意味しうるからである。ホッブズが、国家に対する恐れは「目下直面する死の

---

[25] Jacques Derrida, *La Carte postale*, Flammarion, Paris, 1980, p. 139〔ジャック・デリダ『絵葉書 I ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』若森栄樹・大西雅一郎訳、水声社、2007 年、187 頁〕.

[26] *Id.*, *La Bête et le Souverain*, p. 20-21.

[27]〔訳注〕英語の副詞 presently は「まもなく、やがて」と「現在、目下」を意味する。

打撃」[28]に左右されると言うとき、彼が言いたいのは死の打撃が差し迫っているということである。ラ・フォンテーヌが「最も強い者の理屈はいつも最良のものである。それはじきに明らかになるだろう」と言うとき、彼はその証明がすぐさま始まることを理解している。道徳を寓話の手前に位置づけることで、ラ・フォンテーヌは絶対的な速度という効果を引き起こし、不意に姿を現して冒険を求める狼のリズムに寓話を合わせるのである。彼は寓話を狼のように放浪させる。いつも「さまよい、冒険を求めている」と言われる中世の騎士のように放浪させる。ユーゴーの「放浪の騎士」で表現されるように、ここでの彷徨〔errance〕は「ひとびとの顔に恐怖を残し、きらめきを残しながら突然過ぎ去っていく」[29]稲妻のような素早さと同義である。フランス語と英語のさまざまな言葉を未決定にしたまま、この速度は寓話や脱構築、狼、主権者を同じ運命彷徨＝宛先誤認〔destinerrance〕のうちに運び去るのである。かくしてそれらは同一のリズムに従って突然現れる。同一の時間で現れるのではなく、拍子が外れた不意の到来のリズム、切迫のリズムに従って現れるのである。そして、不意の到来という道が有利な結果をもたらすようにみえる以上、私はこの道をたどり、最終的にそこに多様な場面を見いだしたいと思う。

C. 脱構築の様々な場面

道と場面のあいだには密接な関係がある。つまり、道が速度を場面の上に配するための空間であるのに対し、場面は様々な道の出会いであり、運命の岐路である。これは主権者にも、脱構築にも当てはまることだ。

１）分析の場面

このような出会いの第一の場面は分析的である。デリダが言うように、主権の脱構築は「緩慢だが、とりわけ差異化された」[30]ものでなければならない。実際、主

---

[28] Thomas Hobbes, *Léviathan*, II, XX ; cf. trad. F. Tricaux, Dalloz, 1999, p. 211, n.d.t. n°25〔トマス・ホッブズ『リヴァイアサン　二』水田洋訳、岩波文庫、1992 年、74 頁〕.
[29] Victor Hugo, *La Légende des siècles*, I, XIX.
[30] *Id.*, *La Bête et le Souverain*, p. 113.

権は力と自由からなるものであり、その結果、何も区別せずに主権を非難すると、おのれの自由を失いかねない。したがって、哲学者は主権者に関係づけられており、そのつながりを断ち切るにはおのれを疎外し、無力化しなければならず、一歩踏み出すための結び目が必要となる。しかし、主権を紐解くとまちがいなく結び目が残るとして、その速度はまたはてしなく速いものだろう。ヘーゲルがすでに述べているように、分析は対象を直接的に否定し、これを概念規定へと変形させるので、「概念の直接的な伝達」[31]である。その際、弁証法は分析を矛盾にまで押し進め、矛盾する諸規定が同一化するというひらめきを分析に与える。それは遅さと速さの結合以外の何ものでもない。証拠として、ヘーゲルの聴講生であったオットーの体験を引いてみよう。「前に進む代わりに、（彼の）思考はほとんど同一の表現を用いて、同じ点のまわりをたえずまわっていました。しかし、注意力が落ちて散漫になると、講義から逸れて、数分後に突然我に返って講義に戻っていました。ただその罰として、前後関係はことごとく見失われていました」[32]。にもかかわらず、こうしたことは最後にヘーゲルの政治哲学が到来するのを邪魔するものではない。脱構築の方は、一方で、その差異化がいつまでも矛盾に到達しない以上、弁証法よりも一段と遅い。だが他方で、脱構築ははてしなく速い。脱構築はそれぞれの分析の要素をシニフィアンの連鎖に組み入れ、この連鎖が政治をひとつの言い回しに凝縮しうるからである。こうした角度からデリダはサルトルを読解する。彼はサルトルの速さを非難するが、アンガジュマンのあらゆる価値、つまり「歴史、真理、絶対者、生と死、証言の情熱、救済、救援または庇護」[33]を連鎖状に配置することで彼を加速させるのである。これら諸概念をかすめて漂う注意力はもはや我々をあらゆるコンテクストから遠ざけることはなく、まさに彷徨しつつ、すなわち稲妻のように素早くコンテクストとなる。こうした移動の速さは脱構築の無意識を明らかにし、脱構築を分析に関係づける。かくしてデリダは自分の仕事を「旅〔travel〕」[34]、す

---

[31] G.W.F. Hegel, *Science de la logique*, « La logique subjective ou doctrine du concept », trad. P-J. Labarrière et G. Jarczyk, Aubier Montaigne, Paris, 1981, p. 320 ; cf Jérôme Lèbre, *Le Fil de l'identité - frivolité et puissance de l'analyse chez Hegel*, Olms, Hildesheim, 2008, *passim*.

[32] H. G. Hotto, *Vorstudien für Leben und Kunst*, *in* Th. W. Adorno, *Trois Etudes sur Hegel*, trad. fr., p. 145-146〔アドルノ『三つのヘーゲル研究』渡辺祐邦訳、ちくま学芸文庫、2006 年、250 頁〕.

[33] Jacques Derrida, *Papier Machine,* Galilée, Paris, 2001, p. 179-180〔『パピエ・マシン』下巻、33 頁〕.

[34] *Id.*, avec C. Malabou, *La Contre-allée*, La Quinzaine littéraire-Louis Vuitton, Paris, 1999, p. 25 (lettre

なわち、転位する自己分析の形態をとった速くて絶え間ない移動とみなし続けた。彼にとって重要なのは、飛行機のなかで本を書き上げることでも、ある出来事の瞬間に居合わせることでもない。そうではなくて、いつでもどこにでも到来するものと同じくらい速く進み、ある未確定で予想外の時間＝反時間〔contretemps〕のなかで出来事に出会うことが重要なのである（予想外の時間とは 2011 年 9 月 11 日の上海、またその 20 日後のニューヨークでの時間である）。アンガジュマンは、脱構築されるべき体制の根深さに抵抗する以上、たえずこの体制とは別の場所で理解される。アンガジュマンはこの根深さを分析し、転位し、紐解く。こうしてデリダは、すでにプラトンがその遅さによって素早く動いたように、「別々の道筋それぞれにおいても、あらゆる道筋においても、獲物を追いつづける」[35]と約束するのである。

２）狩りの場面

したがって、第二の場面は狩りである。この場面には、分析し分析される主権者、狩るものであり狩られるものである主権者が再び登場する。ルイ 14 世が象の解剖に立ち会い、「画家の眼下で動けなくなった光景」[36]である。デリダに導かれて、我々はたんにあの場面に立ち会うだけではない。動物に対する主権者の不動の優位性、国王の権力と解剖学の知の同一化、主権の行使や操作に居合わせるだけではない。この動物が王属の狩猟者が放った一撃で死んだばかりだということをデリダは思い起こさせる。この解剖はつまり「決闘の事後」であり、それは「戦場で、さらには、二つの巨大な生きものを対立させたナルシス的な見世物という磁場で」くり広げられたのだ。こうした光景を拍子外れに〔à contretemps〕把握しつつ、脱構築は主権者を解剖し、さらにはその頭部を断ち切る。つまり、脱構築は主権者からその主権をなすもの、すなわち動物に対する優位性をなすものを取り除くのである。フロイトの精神分析がヨーロッパ・キリスト教世界に対するハンニバルの新たな報復として時折姿を現すとすれば、脱構築は主権国家フランスに対する象の報復なのである。

---

insérée de Derrida).

[35] Platon, *Le Sophiste*, 235c, trad. fr. Léon Robin, Gallimard (OC II, Pléiade), Paris, 1950, p. 285-286〔『プラトン全集 3 巻』、59-60 頁〕.

[36] Jacques Derrida, *La Bête et le Souverain*, p. 377.

分析されるこの象は死んでいるのだが、死してなお、君主の人間化に抵抗して走りつづけている。象はデリダの連想の連鎖に加わり、アンガジュマンの思想家やマラトンの伝令者、さらには、「私が少年のころ、ユダヤ教の贖罪の日の数日前に生贄にされた鶏たち、おとずれた不幸から血塗れになって逃げだすかのように、完全に首を切られながらも、要するに頭なしで走りつづけた鶏たち」[37]の連鎖に入る。あいかわらず連想によって、象と鶏はこの地球で最も大きく最も素速い動物であるクジラについて考えさせるだろう。『白鯨』のなかで、メルヴィルは英国のある古い掟を我々に想起させる[38]。それは、「王にふさわしい魚」の筆頭であるクジラとチョウザメは、海辺に連れてこられると王の姿に戻るという掟である。だが周知のように、〔『白鯨』には〕一頭のクジラが銛とその綱を逆に海底へと奪い去り、綱でクジラにつながれた船長が首に巻き付いた綱によって連れ去られる場面がある。こうした狩りの場面で、動物は主権者の権力にたんに反応する〔réagir〕だけではない。動物は主権者に応答する〔répondre〕。つまり動物は反応の速度で主権者に応答するのである。まさにそのことによって、動物は主権者に責任を負わせる〔résponsabiliser〕のだ。思い出しておきたいが、デリダ以前には、おそらくベルクソンが動物の反応と人間の責任のつながりについてもっとも数多く問い、このつながりを本質的な仕方で速度の問いに仕立て上げた。つまり、本能的な反応とは一瞬のひらめきであり、知性による応答は強いられた迂回、本能の遅れでしかない。だが、とりわけ直観――一定の人々を政治に参加させ、英雄にしてしまうような直観を含めて――は反応と応答の完全な媒介であり、責任ある自由なあらゆる応答を最終的に根拠づける。ここに直観的な脱構築の場が開かれる。主権はその行使の諸条件――自由と責任、人間性と動物性、権利と力――を、唯一の正当な権力という不可分な形で示すために、非常に速く、数多くの試みをおこなうが、脱構築はこうした試みにいつも即座に応答するのだ。こうして、デリダはその「旅」において、できる限り正確に至高な主権者たる獣の後を追い、獣に応答するためにその後について行くことをやめないのである[39]。このようにして、哲学の狼は政治の狼の後を追

---

[37] *Id.*, *Papier Machine*, p. 183〔『パピエ・マシン』下巻、35 頁〕.

[38] Herman Melville, *Moby Dick*, trad. A. Guerne, Phébus, Paris, 2005, p. 579.

[39] Cf. Jacques Derrida, « L'animal que donc je suis », *in* Coll., *L'Animal autobiographique*, Galilée, Paris, 1999, p. 251-301.

うのであり、来たるべき民主主義という脱構築の緊急性を理解する方法はおそらくこれ以外にはないのである。

３）演劇的・詩的な場面

第三の、そして最後の出会いの場面は演劇的で詩的である。それは斬首にまつわるゲオルク・ビューヒナーの戯曲『ダントンの死』に始まり、ビューヒナーを解説するパウル・ツェランの『子午線』につづき、『獣と主権者』ではこの場面がくり返される。ビューヒナーの戯曲の主要人物たちは、非常に暴力的であると同時にあまりにも急激な運命に翻弄されており、この「外部にある速いもの」[40]に耐えている。だが、カミーユ・デムーランの妻であるリュシールはある別の方向を体現している。カミーユが芸術について語るとき（第三場）、彼女は彼に耳を傾けることなく彼を見ている。なぜなら、ツェランが言うように、「何について話しているのか知らない」[41]誰か、あらゆるコンテクストから遠ざけられている誰かが必要だからだ。このような漠然とした注意によって、リュシールは何らかの精神の遅れを示しているのではなく、それどころか、あらかじめある時間を自らに与えているのである。運命や政治を追い越し、ダントンやカミーユの言い回しを出し抜くことで、彼女は死刑台を嘲笑う詩の権威を立証している。戯曲の最後で、リュシールは自分を断罪する国王に対して、「国王万歳！」と叫んでこのことを証し立てる。この叫びについて、ツェランは次のように述べている。「それは抗う言葉、あやつり糸を断ち切る言葉です。(…) それは自由な行為であり、一歩を踏み出す行為なのです」[42]。詩の権威はここで、国王の賞賛とは逆のことをなしており、フランス革命よりも革命的である。詩の権威は主権一般を別のものにし、デリダが言うようにその意味を変異させる[43]。この権威によって主権は時宜を逸してきらめく現在となる。この現在こそが、リュシールがおのれの運命に打ち勝つことを可能ならしめ、まさに死へと向かう途中で他者（カミーユ）に時間を与えるのである。「詩が時には我々の先

---

[40] Georg Büchner, *Woyzeck*, scène 8, cité par Paul Celan, *Le Méridien*, trad. J. Launay, Seuil, Paris, 2002, p. 75〔パウル・ツェラン「子午線」飯吉光夫訳、『ゲオルク・ビューヒナー全集』、河出書房新社、1970 年、517 頁〕.

[41] Paul Celan, *op. cit.*, p. 63〔前掲書、510 頁〕.

[42] *Ibid.*, p. 63, 64〔前掲書、511 頁〕.

[43] Jacques Derrida, *La Bête et le Souverain*, p. 307.

を行くことがあります。詩もまた我々の宿駅にとどまらざることあり、なのです。（…）リュシールの場合のように、詩はその形姿によって示された方向を見て取ろうとし、先手を打ちます。我々は詩がどこに生き延び、どのようにして生き延びていったのかを知るのです」[44]。詩は「統辞法のより急な傾斜や省略法のより生き生きとした感覚」[45]に従って生き延びていく。デリダの言い回しでは、詩の力動性は、主権にありがちな性急さを超えることで、主権よりも速く、強力なものとして現れる[46]。つまり、詩は主権を遅延させ、変質させるのだ。それゆえ、あらゆる予想に反して、他者に何らかの時間を与えるのは速度なのである。なぜなら、速度はほとんど動物的な異郷や、呼吸、叫びを、すべての言葉の起源とするからである。ラ・フォンテーヌの寓話（「小羊は喉を潤した…狼が不意に現れ…小羊の命を奪う」）における一瞬の詩的な現在のことをここで確認する価値がある。

ところで、こうした詩的な現在は、エレーヌ・シクスーが接続法現在で素早く用いる「puisse〔「できる」の接続法現在〕」や「vivement que〔～であればいいのに〕」、「じきに」といった表現でくり返される。これらの表現は同じ寓話的な力によって、「生命、視覚、速度〔la vie, la vision, la vitesse〕」という言葉と調和する。〔ラ・フォンテーヌが描いた〕狼の生き生きとした不意の到来と比べて、いっそう字義通りに調和しているといえる。かくして、「はじめに（…）生命があった。生命は他者に対してひとつの語を、ある音節をくり返すことで、生きたまま守られている」[47]。文字は「その亡霊やそれ自身を対象とする」[48]代理の絶対的な速度を移動に与えることもある。こうした代理の権威について論じることもできるだろう。こうした空虚な地位でしかない主権は常に他の誰かによって占められうるがゆえに、無限に分割可能である（国王は死んだ、国王万歳）。こうして我々は、狼の狼に対する狩りにまで素早く立ち戻る。というのも、狼の足取りやその到来の省略において現れるのは、哲学の狼を凌駕する政治の狼の亡霊や幻影にすぎないのである[49]。こうして、

---

[44] Paul Celan, *op. cit.*, p.70〔「子午線」、514-515 頁〕.
[45] *Ibid.*, p. 70, p. 75〔前掲書、517 頁〕.
[46] Jacques Derrida, *La Bête et le Souverain*, p. 307.
[47] Jacques Derrida, *H.C. pour la vie, c'est-à-dire…*, Galilée, Paris, 2002, p. 45 et p. 57.
[48] *Ibid.*, p. 67 et p. 59.
[49] Jacques Derrida, *La Bête et le Souverain,* p. 24.

速度とは完全に権力の幻想〔phantasme〕であり、さらにいえば、権力の遠隔的幻想〔téléphantasme〕[50]なのである。

そして最後に、こうしたことは別の演劇の場面、ロミオとジュリエットにおいて二分され、くり返される――「はじめに、速度があった」[51]というように。二人の恋人は互いの家族の和解も、同じ時間を過ごすことも叶わぬまま愛し合い、死後も生きつづける。彼らはカミーユとリュシールのように愛と政治を結びつける。「両者に死を宣告するこの予想外の時間〔contretemps〕において、そして、死を阻止し、その到来を宙づりにし、相手の死に寄り添い、それに耐えて生き延びるのに必要な猶予を保証する予想外の時間において」[52]結びつけるのだ。それゆえ、ダニエル・メスギッシュが劇場で、またオリヴィエ・カディオがオペラで加速させた悲劇は、寓話の解決として描かれている。愛は最も強い者の権利の解決として描かれる。また予想外の時間は、この上なく短い時間で、他者に自分の時間を与える唯一の方法として描かれている。ここには、現代〔les Temps modernes〕におけるあらゆるアンガジュマンの道があり、デリダとサルトルのあいだで交わされた「ジュテーム〔je T.M.〕」の意味がある。つまり、脱構築とは思考と政治のあいだにある愛の場面であり、永続的とは言わぬまでも、むしろ有限ないしは無限定な、さらには現在における予想外の時間に捕らえられている場面なのだろう。

「皆様、私は終わりにいます、そして再び始まりにいるのです」[53]とツェランは聴衆に述べ、自己から自己へと向かう迂回によって出会いへと至るこの道のりを子午線と呼ぶ。まさにこの子午線に従って、脱構築は政治の後を追う。稲妻のように素早い速度で、つまり誰かが課した歩行の速度ではなく、自分から関与して走る速度、一匹以上の狼の速度で後を追うのだ。自分自身の勢いに巻き込まれた思想家デリダはそのように走るのであり、死してなお走りつづけている。最後に次の一節を引用しておこう。「そして、ものを書くとき、私は自分自身をあの鶏のようだと考えるのです。しかし、そう思うとき、私はただ自分が死んだ後で、本当に死んだ後

---

[50] *Ibid.*, p. 91.
[51] *Id.*, *Psyché*, *II*, Galilée, Paris, 1987-2003, p.131.
[52] *Ibid.*, p. 133.
[53] Paul Celan, *op. cit.*, p. 79〔「子午線」、519 頁〕.

で鶏のように走っていることに気づくだけなのです。決してそうできた試しはないのですが、私は理解しようと努めました。何のために、誰のために、誰の後を、何の後を私はこのように走っているのだろうかと。（…）死んだ走者というこの奇妙な時間以降、誰が、そして何が私に回帰してくるのかを、むなしくも私は知ろうとするのです。というのも、私に回帰するということは、同時に、ただの一度で、私に同一化するということと、私の自己性を構成するということを意味しているからです。自己性とは、私がそこに戻ることなしにそこに在るところのものです。そして、私に回帰するということは、私が私の幽霊のあとを息を切らしながら追っているようなものです。つまり、その亡霊はそれほど私よりも速いのです!」[54]。

Jérôme Lèbre, « Pas de course : déconstruction et vitesse
de la politique chez Jacques Derrida », *Vitesse*, Hermann, 2011.
翻訳＝西山雄二（首都大学東京・准教授）、
亀井大輔（立命館大学・准教授）、横田祐美子（立命館大学・博士課程）

[54] *Id.*, *Papier machine*, p. 182〔『パピエ・マシン』下巻、35-36 頁〕.